

日本番外地  
の群像

玉川信明  
リバータリアンと解放幻想

目次

日本番外  
地の群像

編者まえがき

第1部

世情の幻灯師 — 詩人・文士篇

- 10 イノチガケでなければ芸術ではない  
\*稲垣足穂 \*金子光晴 \*田中英光 \*坂口安吾
- 32 不良少年がピカピカ光っていた  
\*今東光 \*サトウハチロー \*菊岡久利 \*萩原恭次郎
- 54 心優しき詩人は世俗に手を振る  
\*高橋新吉 \*萩原朔太郎 \*生田春月 \*武田麟太郎 \*宮嶋資夫
- 70 いま罵辞毒舌がおもしろい  
\*草野心平 \*田中小実昌×稲垣足穂×金子光晴 \*武林無想庵  
\*大泉黒石 \*林芙美子

## 第2部

永遠の妖言師 —— エッセイスト・思想家篇

- 94 東西兩陣営がSEXをいじめる  
\*平野威馬雄 \*阿部定×坂口安吉 \*埴谷雄高×高橋鐵×深沢七郎
- 114 ニヒリズム、よく人を走らす  
\*深沢七郎 \*辻潤 \*小野庵保蔵 \*新居格 \*市橋善之助
- 135 君もアフランシになりたまえ  
\*西村伊作 \*松尾邦之助 \*植村諦他 \*自由クラブ異人
- 151 では、おれの実践方策を授けよう  
\*太田典礼×森敦 \*富士正晴 \*ト部哲次郎×辻潤 \*武者小路実篤

## 第3部

時代の舞蹈師 —— 芸術家・探究者篇

- 172 監獄はおれの遊園地だった  
\*梅原北明 \*小生夢坊×梅原北明×中戸川薫明×尾高三郎×花房四郎  
\*石井漢 \*山崎今朝彌
- 195 なぜか浅草には奇人が多い  
\*宮田文子 \*添田知道 \*猯与太平(古海卓二) \*岡本一平 \*竹久夢二
- 217 強権に唾する者、セクソロジスト  
\*伊藤晴雨 \*高橋鐵 \*小倉清三郎・ミチヨ \*山本宣治
- 240 善き人、善き社会をつくる  
\*高田保 \*斎藤昌三 \*中西悟堂 \*西田天香 \*山下清

## 第4部

オマケ

- 260 明治の気骨ある番外地  
\*中里介山 \*斎藤緑雨 \*川上音二郎 \*宮崎滔天 \*中江兆民
- 283 番外地の番外地「半世紀崎人伝」

付||リバータリアン系主要雑誌目次 299

番外地人物関係年表 302

解説 —— 番外地人物の時代と思想の背景を講開する 玉川信明 307

参考ブックガイド 319

本書に登場する大正期の哲人<sup>サイジエント</sup>文士辻潤は、大衆との間に深いつながりをもっていた。大衆的ではありえない自己というものを持つていた人物である。みずからはニーチェの「超人」に対するに「低人教」の信徒と称し、相手の主義、人格、才能、美醜、貧富のいかんにかかわらず交際し、職人、役者、売春婦、相場師その他なんでもござれで交わった。その辻潤が他方では、大衆について心底から嘆き悲しんでいるところがあった。ことに辻潤らが「大正期、ただ己れに忠実に生きようとしただけで、あるいは支配者が要求し、保護する世間の常識なるものに逆らったがゆえに、世間によって袋叩き同然の目にあわされた際には、大衆を指して「低能無知下劣浅薄不作法の民衆野郎！」とイカリ心頭に発していた。

こうした辻潤の世界を窺うに、実際には彼が訳して、妻の伊藤野枝の名前で発表しているアメリカの著名な女流アナキスト、エマ・ゴールドマンの「少数者と多数者」という文章がある。その趣旨を簡単にいうと――

現代とは決定的に量の時代であり、質が問題にならない時代である。多数者の精神がいたるところを占領して、質を破壊している。多数者は理性を働かせず、ドルを神とし、独創と道徳的勇氣に欠け、常にその運命を他人に委ねる。責任に立ち向かうことができない。しかもそれにとどまらず、新しい真理の先駆者である少数者に対し、反対し告発し追い回す。その意味では世論は絶大な暴言であり、現在は個人と少数者の時代だとされながら事実はまったくその逆の時代である。大衆と反対に常に高い精神を抱いて目覚めている者は、少数者である。いつ、どの時期においても少数者のみが、偉大な理想、自由解放の旗手の位置にあった。――

かつてこの文を読んだ私は深い共感の念を覚えたものであるが、これとほとんど同じ意味のことを、やはり本書に登場する松尾邦之助が、生前私への書簡で語っている。「多数者は絶えず間違っている、少数者に栄光あれ」、もっと徹底しては「集団の倫理はその集団にししか通用しないが、個人の倫理は個人なるがゆえに全人類の倫理に通じる」。

その意味では、彼らは一様に徹底した野人でありながら……むしろ大衆志向の保守的ともいえる人格ですらありながら、単なる「民主主義者」ではなかったことになる。

振り返って現代も同じ現象にある——というよりは、ますますその真実性が実証されている時代であると思われる。現代は大衆時代であると同時に、豚衆<sup>えしやう</sup>の時代である。この豚衆と豚衆文化を知識人は民主主義の名において無自覚的に容認し、ノンを唱えることを恐れている。その理由は、ひとえにかつての大衆批判者のようには大衆的でありえないがためであるが、今まさに必要なのは、これら勇氣ある少数者ではあるまいか？

特異な個性としての、あるいは探究と創造者としての少数者が、今日ほど求められている時期はなからう。

現代は戦前をも含めて、あらゆる思想哲学の効用性のためしつくされた時代であり、いわば虚無の時代である。戦後来のあらゆる価値観はひつがされ、ただいたずらに間延びのした裸形の生活の残骸のみが横たわっている。かの宮崎勤の幼女の連続殺人事件にも、私はそうした腐敗した現代の写し絵を見ざるをえない。

この状況にどう対処するのか？　すでにそうした問いも虚しく宙に吸い取られていくような現状ではあるが、あえてそのように問い直せば、すでに過ぎ去った歴史に説明と教訓を求めるといいたしかたないのではなからうか？　多分そうした思いを込めて、こうした双書の企画がなされているのであろうが、ことに日本では、時代を大正の思潮にまで遡れば、現代にも通じる、さまざま暗示と展望がほの見える時代といえる。

そこには辻潤のような、身はボロに包まれていようと心は錦よ、といった徹底した哲学と粗野なエネルギーに満ちた世界があった。私はこのような一群の少数の人々を、「リバータリアン」と呼ぶ。

リバータリアンは、通俗に言って、自己解放の苦渋に生きるアナキーな一群の人々のことを指す。リバータリアンは、アナキーな心情の持ち主なるがゆえに時代から外れた奇人変人のようにみえるかもしれない。しかしその実態が、ただ大衆にとって縁が薄いか、さもなければ大衆が求めようとしないうる真実探究の徒であったというだけで、変人奇人呼ばわりされるのであれば、何をか言わんやである。彼らこそ天に選ばれし人々なのだ。

(玉川信明)

一、本双書全31巻は、NRK出版部が、社会評論社、クライシス東中野事務所、Nアトリエ、ゆうプロジェクトの協力のもとに編集・制作する、近世・近代日本三百年間にわたる生きた思想の記念碑的なアンソロジーである。

一、全体的な編集企画には、編集委員会（いいたもも、今井清一、小田切秀雄、加納実紀代、鈴木裕子、寺尾五郎、永畑道子、降旗節雄）が当たった。

一、各巻の編集・執筆には、三十四名にのぼる各巻責任担当者が全力をもって当たり、かつ二年を越える編集・執筆者会議における共同討論の成果を十二分に反映した。

一、全巻の校閲には、編集委員会代表いいたももが当たった。

一、各巻編著者が構成した本文テキストの底本は、各々編著者自身による脚注に明記されているとおりであるが、必要に応じて編集部・校閲者による他本との照合・校訂を経ている。

一、現代読者向けのアンソロジーとして、本双書は基本的に、常用漢字、現代仮名遣い、現代式標示法を使用するとともに、難読漢字については適宜開くかルビを施した。ただし、編著者の方針により次の例外を認めた巻がある。

古文は原則として歴史的仮名遣いを使用した。編著者の方針により現代仮名遣いに直したものも含まれている。

漢文は原則として読み下し文としたが、編著者の方針にしたがい、原文・読み下し文並記、あるいはまた現代語訳としたものもある。

一、現代読者のため、原文にはない小見出し等を付けたものもあるが、その場合には「」内に納めて原文との区別を明確にしてある。

一、本双書は、著作権（没後五十年まで）の現存する「生きた文献」を多数収録しているところが、一特色となっている。著作権所有者との交渉は、(財)日本著作権協議会発行の著作権台帳その他にしたがって鋭意努力したが、事柄の性質上、本双書収録文献のうち若干、著作権所有者の消息不明、連絡途絶のものがまだ含まれている。(恐縮ながら当該文献にお気付きの関係者は、ご一報を賜りたい。)

一、全31巻を通して、印刷・製本には日本製版株式会社、用紙手当には木邨紙業がそれぞれ責任をもって当たる。

1 稲垣足穂

金子光晴

田中英光

坂口安吾

2 今 東光

サトウ ハチロー

菊岡久利

萩原恭次郎

3 高橋新吉

萩原朔太郎

生田春月

武田麟太郎

宮嶋資夫

4 草野心平

田中小実昌

稲垣足穂

金子光晴

武林無想庵

大泉黒石

林芙美子

詩人・文士篇  
第一部  
世情の幻灯師